〔書評〕

芦谷信和著『国木田独歩の文学圏』

北野昭彦

著者は「あとがき」に「近年、文学の研究方法は著しい変化を見た。然しそれに気を奪われても仕方がない。最早傘寿を迎えたわたくしはわたくしの方法を貫き通す以外にない」と述懐する。

ロラン・バルトの「作者は死んだ」、ミシェル・フーコーの「作者とは何か」をはじめ、脱構築批評、読者反応批評、神話的元型的批評、構造主義的批評、フェミニズム批評、ジェンダー批評、文化批評、ポストコロニアル批評、等々、さまざまな理論家の現代批評理論が現れ、これに科学史家トーマス・クーンの「パラダイム転換」説が結びつけられて、文学研究のパラダイム転換が叫ばれてから既に久しい。あれは現代の思想界全体のパラダイム転換が、文学研究にも及んだ余波の一つではなかったか。

冒頭に引用した著者の述懐に対し、どうコメントするかは、本書の読者（研究者）の世代と研究姿勢によって異なるだろう。

本書の構成は次のようになっている。

序　章　独歩の幼名「亀吉」は藩主の幼名
第一章　国木田独歩の見た朝鮮・中国
——実子説を裏づける一つの事実——
第二章　独歩と花袋（比較対照的作家論）
——『愛弟通信』——
第三章　藤村のモデル問題をめぐる諸家の評論と独歩の文学観
第四章　独歩圏内の『或女』——信子像の創成——
第五章　独歩の自然主義
第六章　「牛肉と馬鈴薯」
第七章　「富岡先生」の主題と構想
第八章　「少年の悲哀」
第九章　「春の鳥」
第十章　「窮死」の三つのポイント
第十一章　その詩集入手前後の独歩のワーヅワース観
第十二章　ワーヅワースをめぐる独歩の湖処子批判
評　釈　独歩の漢詩

本書が『国木田独歩の文学圏』と命名された所以は「まえがき」に記されているから、要約する。(1)「基本的な時空を基準とする領域」として独歩出生の問題があり、(2)「空間的な文学圏」が、朝鮮・中国・イングランドへと拡がる。(3)独歩の文学圏の「ジャンル」は、報道、小説、評論などに及ぶ。(4)独歩の文学圏を「文学史的推移の観点から」見れば、「浪漫主義から自然主義」へ展開する。(5)独歩の文学圏を「素材の点から」見ても多彩で、特に少年の世界、下層労働者の世界を素材にした作品が注目に値する。(6)「思想的関心も古今東西に」わたり、「驚異」と「信仰」の問題は特に注目に値する。(7)「独歩の人脈上の文学圏」の中に、田山花袋、島崎藤村、有島武郎、宮崎湖処子、「牛肉と馬鈴薯」に投影された各界の人物等が挙げられる。「『国木田独歩の文学圏』はこのように多様な概念を本として名づけた標題」である。

以上の説明では、「ジャンル」上の「独歩の文学圏」で独歩の「詩」が論じられず、「独歩の人脈上の文学圏」で柳田国男や徳富蘆花に触れられていない、などの多少の不満がある。とはいえ、こうした多様性が「文学圏」という概念で統括されることによって、本書は論文集以上の研究書になり得ている。

序章の「独歩出生の問題」は、今や実子説に決着した観がある(拙稿「国木田独歩」学燈社『國文學』9月臨時増刊号『作家の謎事典』一九八六・一)。が、独歩の幼名「亀吉」が、国木田家が仕えた竜野脇坂家の第十代藩主の幼名と同じだという指摘は、新資料に基づく著者の新見である。専八が「崇敬すべき藩主の名前をわが子につけたこと」は、「父親としての亀吉への期待と愛情の大きさ」の現れだという著者の言葉は、実子説をさらに動かしがたいものとする駄目押しの決定打である。

第十一、十二章は独歩の主体形成期の問題を追究したもので、冒頭を飾るに相応しい力編なのに、なぜ最後に回されたのか。

誤植が一七九頁の冒頭にある。「明治三十五年後半」は誤植、「明治二十五年後半」が正しい。これは、独歩が最初に入手した『ワーヅワス詩集』がジョン・モーレー編だという通説を覆し、マシュー・アーノルド編『ワーヅワス詩集』だという著者の新説を実証するための重要な数字なので、留意されたい。

第十二章の見どころは、「ワーヅワースをめぐる独歩の湖処子批判」を、逍遙・鷗外の「没理想論争」も視野に入れて当時の文学的状況の中で捉えている点にある。中でも、「『没理想』の提唱という点では、湖処子の方が早いという点は注目すべきである。あるいは逍遙の没理想理論はこの湖処子の論に啓発されるところがあったのかもしれない。(中略)また湖処子の論は『小説神髄』の写実論に啓発されている」という読みは著者の卓見である。

ここで「ワーヅワースを無限無窮の天地のうちに生きる人々を捉えた『天地生存』『個人感』を示した詩人」とする独歩のワーヅワス観と、独歩の「信仰(信念・確信)に基礎を置く、浪漫的

な宗教的、形而上学的な文学観」が明らかにされる。

その次に第一章を読むとよい。従軍中、独歩が朝鮮や清国の民に感じたヒューマニスティックな共感を、「一切無差別平等、自他一如の同胞意識」と見る著者の見解は卓見である。ただし、これと「独歩の国際性」とは次元が違う。「自他一如の同胞意識」とは、ナショナリズムもインターナショナリズムも介在しない、所謂「個人感」の「浪漫的な宗教的」な人類普遍の意識であり、そこに独歩と白樺派との近似性が認められるのではないか。

第二章、三章、五章は、このような独歩と、所謂「日本的自然主義」作家との相対化であり、第四章は、白樺派作家でありながら白樺派離れもしている有島武郎との相対化の試みである。

このうち、図式化し過ぎて平板な第二章より、第三章の方が、独歩、藤村、花袋をみごとに相対化し得ており、しかも、モデル事件の起きる日本の精神風土が形成された淵源を明らかにしている点でも注目される。この第三章の次に第四章を読むと、花袋、藤村、独歩、有島の、より鮮明な相対化が可能になるだろう。また第四章は『或女』を「独歩圏内」から限定的に論じたものであるが、かえってユニークな『或女』論になり得ている。

作品論では第六章「牛肉と馬鈴薯」論に、「驚異」思想を主題とするこの思想小説の技法に関する優れた指摘があるが、日清戦争後の歴代の短命内閣を延々と列挙しているのは頂けない。第九章「春の鳥」論では、事実と虚構化の説明に比重をかけすぎている。六蔵に死なれた母親が、生前の六蔵を真似て鳥の羽搏く所作をする場面などは、むしろ、六蔵が死んで春の鳥になり、自然に回帰する結末の伏線として引用すればよいのではないか。

作品論で優れているのは第七章、八章、十章である。

第七章で著者は「富岡先生」の主題と構想を考察し、これを富岡先生の娘梅子への求婚譚的な展開を通して、功利的な立身出世主義を否定し、「愛と誠と労働」に基づく生き方を賞揚した小説と解し、「人物形象がみごとに造型された作品」と評価する。

第八章では「少年の悲哀」の構成、人物形象、情景描写、題名、思想、主題を考察して、これを運命観を主題とする小説と解し、人の心の優しさ、「その雰囲気、環境描写と人生を抒情的、浪漫的な筆致によってみごとに融合している」作品と評価する。

第十章で著者は、「窮死」の文公を死なせたのは社会組織の不完全さと無情な自然の境遇であり、これは社会悲劇であり、境遇悲劇でもあり、また人間存在、人生の不思議と「運命」への「驚異」を描いた作品でもある、と重層的な読みをする。そして「浪漫性と現実性の二つの要素を小篇の中に緊密に、有機的に結合させることに成功した稀有な優れた作品」と評価する。この著者の読みと評価は正鵠を射ている。なぜなら、轢死者の現実は、独歩の時代よりは社会保障の進んだ現代でも、まだ過去の問題ではないからである。著者のような「窮死」の物語世界の重層的意味の発見は、この作品の価値の再発見につながるであろう。

本書の中で第七章、八章、十章が特に優れている所以は、著者

の読みの深さ、読者反応批評にも一脈通じるようなテクストの読みの深さと、意味の生産である。独歩のように「十二分の感興を蔵して其五六分を描」く短編作家の作品は、このような読みによってその価値を再発見され、読み継がれるに相違ない。

（双文社出版、二〇〇八年十一月十五日、二三七頁、本体価格四五〇〇円）

（きたの・あきひこ　西安交通大学客員教授）